



岩手県盛岡市
 医療法人 小笠原眼科クリニック
 おがさわら 孝祐 院長

出会いに育てられた眼科医人生に感謝

う言葉を賜った。私はこの言葉を座右の銘としている。

当院は来年開業30年目を迎えるが、これまで眼科医として使命感を持ちながら仕事を続けてこられたのは、多くの方との出会いとご指導の賜物であると感謝している。米国留学中にStein教授からいただいた「各人には必ず一つのgiftが与えられている。possibilitiesは無限にあるよ」という言葉を忘れず、多様化している眼科医療をこれからも天職として楽しめればと思っている。

私は昭和52(1977)年に岩手医科大学を卒業し、剣道部の先輩からの誘いを受け、眼科学教室に入局した。1年間の目まぐるしい臨床研修の後、大学院生として本格的な研究生活に入ることとなった。田澤豊教授が神経眼科外来の設立を目指していたため、神経解剖学を研究する機会を与えられ、第一解剖学講座にお世話になることになった。当時の主任教授の川村光毅先生(後に慶應義塾大学教授を歴任、今年ご逝去)は、オスロ大学のprof.教授の下に3年間留学歴のある卓越した研究者であった。指導は極めて厳しく、助手以上の研究発表や論文は全て英文が原則で、大学院生の論文も英文のみであった。研究についてのdiscussionは深夜1時から始まることもあり、当時、幼かった娘に家で会うと「今度いつ来るの」と言われる生活となっていた。

このような中、大学院3年生の秋に星兵仁先生から「来年3月に第3回国際神経眼科学会が開かれるようだけど、行ってみたら」と声を掛けていただいた。大変興味があったため、一大決心をして川村教授にお許しを得に行ったところ、「学会案内文を読んでみたまえ。君の英語が理解できたら許す」と言われ、何とか学会に参加できることになった。この時期は日本神経眼科学会の黎明期であり、北里大学の石川哲教授がリーダーとなり、北里大学、東京慈恵会医科大学、大阪医科大学の総勢15人ほどの先生方にご一緒させていただき、スイスのValbellaに9日間滞在した。有名な教科書の著者が沢山おられ、内容も非常に高度で理解できない点も多々あったが、それ以上に大きな刺激を受けたことは生涯の財産となった。また、マッターホルンを望む場所ですキーを楽しむことができたのも忘れられない思い出である。

私が大学院で研究していた内容は中脳上丘の線維結合を軸索流を用いて明らかにすることであった。論文はNeuro-Ophthalmologyに投稿することになったが、そのeditorの一人

であった石川哲先生から3日間にわたり直接ご指導いただいたお陰で論文は投稿後3か月で受理された。その後、研究を生理学的ならびに行動学的な面から続ける目的で米国バリーニア医科大学のBARRY STEIN教授の下に留学する機会を与えられた。Stein教授は38歳の新進気鋭の研究者であり、連日深夜まで研究を行なう生活が待っていた。「燕より早く起き、フクロウより遅く寝るの?」と某教授から言われたこともあった。

私は帰国後、日本神経眼科学会の中で最もホットな話題として議論されていた斜視(外眼筋)のsensorimotor reflexの機序について研究を進めることになったが、当時の学会の熱気を今でも鮮明に覚えている。Stein教授の下には、私の後に北里大学の関谷久先生、新井田孝裕先生が引き続き留学され、研究を進展させてくれた。学会を通じて大変お世話になった三井幸彦徳島大学名誉教授からは「Patients are the best teachers」とい

The third international
 Neuro-Ophthalmology Meeting
 Valbella, Switzerland
 March 16-20, 1980



Valbella Lenzerheideスキー場にて、左から福田敏雅先生、谷いづみ先生、石川哲先生、私。